「実践事例集Vol.13」（2016年4月発行）で

紹介している事例を中心に抜粋しています。

（公益財団法人 ソニー教育財団）

ソニー幼児教育支援プログラム　幼児教育 保育実践事例サイト
http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/

実践事例集
http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/practice/

遊びを学びにつなぐ「科学する心」

～「考える」ことは「優しさを育む」こと～

平成 27 年 9 月14日

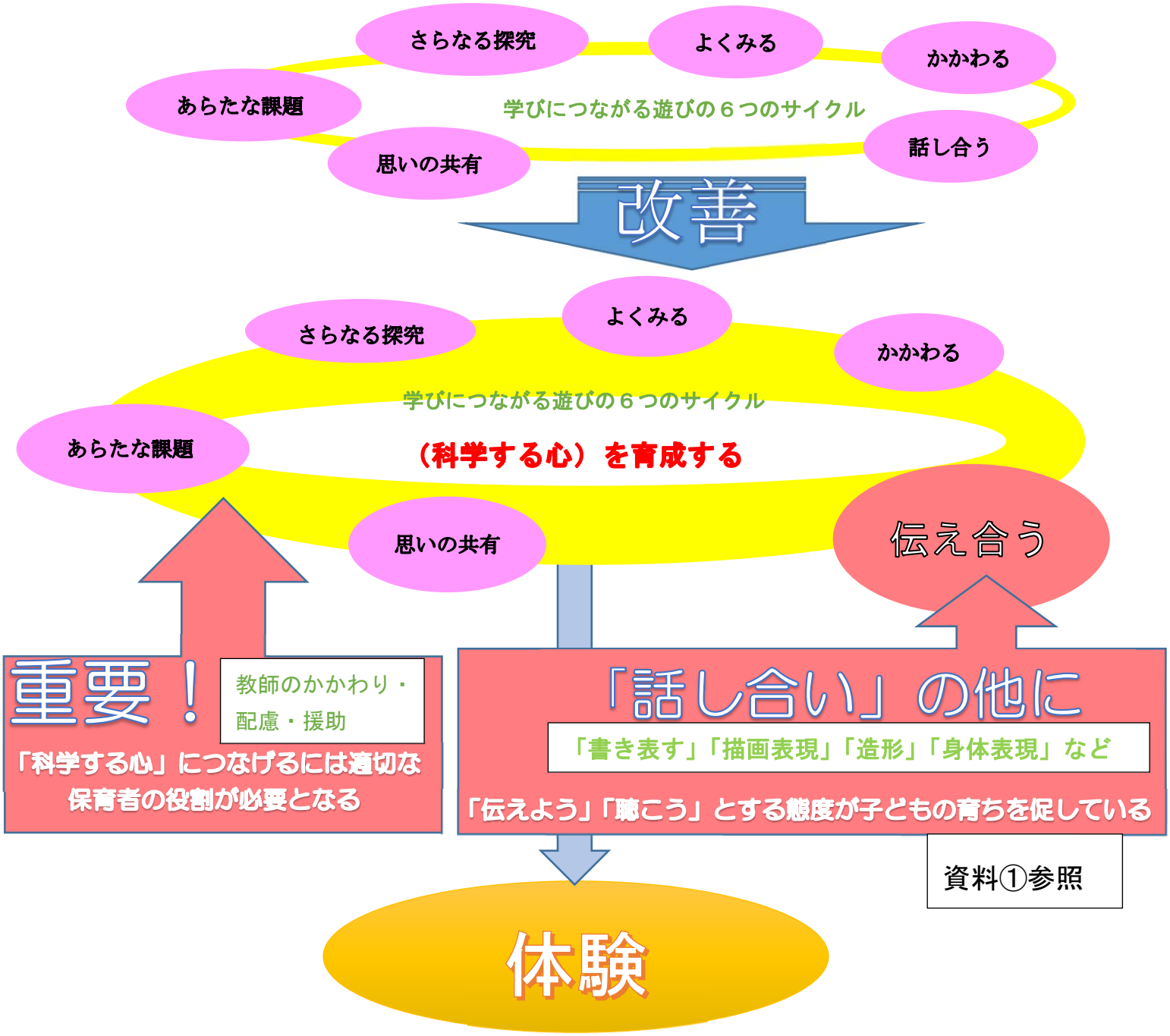
富田林市立錦郡幼稚園

○はじめに

今年度より子ども・子育て支援制度が施行され、「幼児期の学校教育」と言う言葉がクローズアップされた。従来通り幼児教育は「遊び」によるものであるが、その「遊び」自体がどんな「学び」につながるのかを保育者自身が意識化し、子どもに意図的に働きかけていかなければ「質の高い遊び」にはならない。私達が研究の中で追い求めていた「科学する心」は「遊び」を「学び」につなげるためのキーワードであることを今改めて感じている。

「遊びを学びにつなげるためのプロセス」そのものが「科学する心」ではないだろうか。
例えば「単なる遊び」が自己中心的なものであるとすれば、そこに「科学する心」が芽生えることで子どもの脱中心化を促し、考えることを動機付ける。すなわち「学び」に変化する。今年度はその視点をもって進めた研究をまとめた。

「科学する心」の育成をめざして（研究からみえてきたこと）



よくみる

「おや？」と立ち止って見る。「なんだろう」「どうしてだろう」と観る。「どうなっているんだろう」と考えて観る。「こうんなふうになっているのかな」と推測して視る。「こうしてあげたらいいかな」と愛着、愛情をもって看る。「みる」ことは「感じ」「考える」スタートであり、比較的幼い時期から発達してくる。

かかわる

好奇心旺盛な子ども達は目を輝せてみたことに興味をもち、自分なりにかかわりを楽しむ。そして、自分なりの考えを生み出していく。保育者は存分にかかわるための空間、時間、モノを保障する。一歩を踏み出せない子どもに寄り添い援助する。諸感覚を通した体験は実感を伴って子どもの中にため込まれていく。

伝え合う

気付いたこと、思ったことを様々な表現方法で伝え合う。自らの思いや考えを伝え共感し、受け入れてもらえる心地よさを味わう。相手からも受け取り、自分と違う考えや気付かなかったことを知る。相手にどうすれば上手く伝わるかまた、表したい思いを試行錯誤するその過程が学びにつながる。ときには言葉にならない相手の心を推し量ろうとするなど思いやりの気持ちが芽生えてくる。

思いの共有

共感や葛藤、反発もあって一つのことにみんなで心を寄せていく。自分自身に自信をもち、友達の良さや違いを認めていく。一つの目標に向かってそれぞれの力を発揮しながら問題解決に向かう。協同性につながっていく。

新しい課題

友達の考えに触れたり、粘り強くモノゴトにかかわることで、新しい疑問や挑戦意欲が生まれてくる。

更なる探究

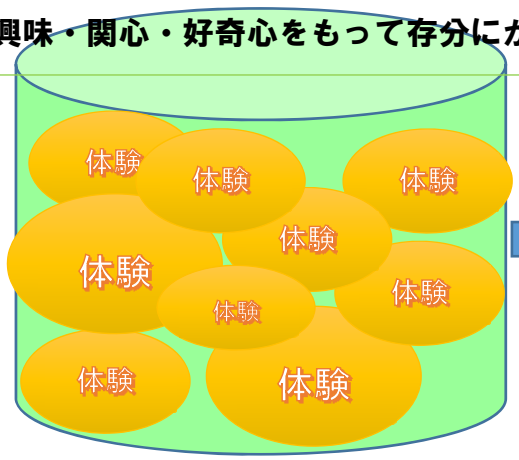
保育者はそのチャンスを逃さず、更に取り組めるような適切な助言や環境を設定する。新しいモノの見方、多様なかかわり方で子どもの考えは深まっていく。

保育者のかかわり・配慮・援助

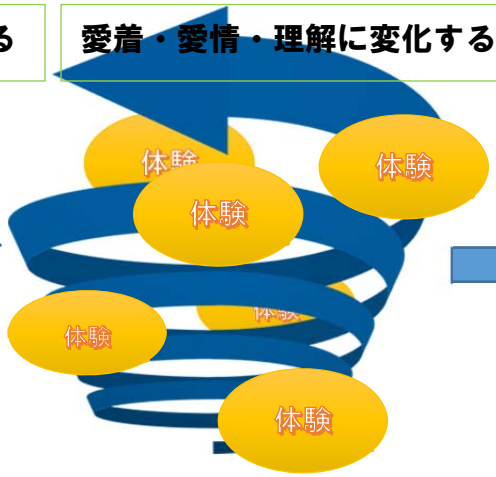
子どもは好奇心旺盛ではあるが、飽きるのも早い。自然に任せているだけでは上記のサイクルは途切れてしまう。そこに保育者の意図的な言葉がけや教材の投げかけ、環境構成、子どもの育ちの読み取りが必要となる。「科学する心」を育成するには子ども、保育者双方の粘り強さがいる。

上記サイクルを繰り返す中で体験はため込まれ、スパイラルに絡み合いながら、新しい「体験」を生み出していく。これが幼児期の「学び」であると考える。

興味・関心・好奇心をもって存分にかかわる



愛着・愛情・理解に変化する



- 考えが深まる
- 考え方が広がる
- 実感を伴った思いやり、優しさが生まれる

学びにつながる遊びを体験としてため込んでいく
～「科学する心」のサイクル～

入園当初、子どもの緊張感をほぐすためにも思い存分感触を楽しみ、開放感を味わえる遊びを取り入れて幼稚園生活をスタートさせる。先生と友達と楽しい遊びを通して集団生活を知り、徐々につながりを深めていく。一見不安そうに見えるこの時期でも子どもの「科学する心」はすでに目覚めている。むしろ、概念にとらわれず見逃せないその子なりの感性が色濃く表れている。

２０１５年度　１学期　　４歳児

はなぐみの子どもたちは幼稚園でたくさんのことに興味をもち、いろいろなものにかかわってみたり、発見したことを伝えようとしたりする姿が見られた。大人の私たちが普段当たり前だと思っていることや、立ち止まって考えないようなことにも、子どもたちは**「ふしぎだな」「おもしろいな」**と感じている。このような子どもたちの「**感じる心**」を大切にしていきたいと思い、保育を進めているところである。

①水たまりができた！

入園式以降は雨の日が続き、**水たまり**がよくできていた。

水たまりを発見すると、スコップで水や泥をすくって遊ぶことを楽しんでいた。

よくみる

かかわる

溜まった雨水を汲んで地面に流して遊んでいると、**「水たまりができた！」**と、とても嬉しそうな声で伝える姿があった。雨が降ったあとにできた**水たまり**と一緒であることに気付いた瞬間だった。

水たまりができた！

伝え合う

ある日、泥んこ遊びをして砂場に水がたくさん残っていたが、お昼になるとその水がなくなって固まっていた。それを見た子どもたちは、**「水が乾いた！」「水が沈んだ！」**と驚いて声に出していた。自分たちが遊んでいた時にたくさんあった水がなくなっていることにとても驚き、それぞれの表現が出たのだと思う。水がなくなったという同じ状況を見ながらも、その言葉の違いから、子どもによって捉え方や考え方、表現方法が異なることが伺える。

あらたな課題

後日、また砂場で泥んこ遊びをして砂場にたくさんの水を溜めた。その翌日も砂場の水が残っていた。そのことに気付いた子どもは、**「あれ？今日は固まってない！」**と驚いた表情で大きな声で伝える姿が見られた。前回、泥んこ遊びの後に水がなくなっていたことから、今回もそのときと同じように固まるだろうと予想していたのだと思われる。しかし、予想とは違うことが起きたので、驚き、感動が生まれたのではないかと思う。入園当初から、水を土に注ぐと泥になることや、固まった土などに興味を示していた。この姿から、今回と前回の土の違いを**比較**していること、前回の経験から次はこうなるのではないかと**予想**していることが読み取れる。

②固くなった！

４月中旬、Ｒ児は泥をフライパンに入れ、指でプスプスと穴をあけて遊んでいた。そして「明日どうなってるかな？」と楽しみにしていた。翌日、どきどきしながら触って確かめてみると、少し固くなっていた。その日以降も同じ場所においておき、毎日触っているＲ児は、日がたつごとに固くなっていくことを発見した。

この経験をしてからは、泥で作ったものを固めるにはどこにおけばいいのかを考え、日の当たるところや、雨が降りそうな日は屋根のあるところに置くなど、自分なりに考えて遊んでいく姿が見られた。

翌日

ちょっと固くなってる！

かかわる

入園当初から砂や泥で遊ぶことが大好きだった子どもたちは、型抜き遊びをしたり、泥団子作りを楽しむ姿が増えていった。また、泥んこ遊びを続けていくことで、泥に触れることに抵抗のあった子どもも、少しずつ泥に興味をもって触ってみようとする姿が見られるようになった。

③形になりやすい土

（１）園庭の土

かかわる

砂遊びをしていると、屋根から雨水がポタポタと落ちてきた。それを見て、「お団子をつくるのに使えるかもしれない！」と雨水でぬれている土をとって丸めたり触ったりして遊ぶ姿が見られた。乾いている土よりも、少しぬれている方が団子を作りやすいと考えたのだと思われる。また、作った泥団子に何度もさら砂をかけ、毎日丁寧に作っていたＹ児は、転がしても崩れない泥団子ができたと喜んでいた。そのことがきっかけで、どこの土で作ったのかを写真で撮り、「どろだんごまっぷ」を作ることにした。泥に興味をもっている他の子どもたちにも知らせることで、自分もその土で作ってみよう、ほかの所の土はどんなのかな、とさらに興味が深まるのではないかと思った。

どろだんごまっぷ

転がしても崩れないことを試してみる。

さらなる探求

（2）里山の土

よくみる　かかわる　伝え合う　思いの共有

本園から子どもの徒歩圏内に奥の谷という里山がある。６月上旬、初めてその里山へ出かけたときに、幼稚園にある土と比べて色や感触の違う、ねっとりとした赤茶色の土を発見した。すると、すぐに実際に手で感触を確かめようとする子どもの姿があった。その感触だけで、幼稚園にある土とは違うものだと感じたようだった。その土は粘度が高く、すぐに形になりやすいもので「すぐ丸くなる！」と驚いた様子だった。

感触の違う泥に心を動かし、さっそく丸めてみる。

その土に興味をもち、丸めた団子を大切に持って歩いていた。それからは、泥を見つけるごとに、どんな感触のものなのかを触って確認したり、色の違いを見たりする中で、「さっきとはまた違う土や。」「（持っている）この土と一緒や。」などと、つぶやく姿があった。これはどうなっているのかな、確かめてみたい、もっと知りたい、という気持ちが膨らみ、とても意欲的な姿が見られた。

ねっとりした赤茶色の土

この赤茶色の土で泥団子を作ってみることで、その土の感触と見た目を知ることができたのではないかと思う。その後に見つけた土は、場所も土の色も違うものだったが、また手で触って感触を確かめる姿が見られた。泥団子を作ることができる土を自分で見つけ、丸めてすぐに形になることを楽しんだことで、同じ性質の土を探そうと意識をもっていたのではないかと考えられる。ほかのものを自分なりに確かめ、比べることでそのもの自体の性質を知り、探究する力がついていくのではないかと感じた。

この子どもの姿から、見たものを実際に**触って確かめる**ことをこれからの保育の様々な場面で大切にしていきたいと思った。保育者がその思いをもっていることで、子どもたちの中にも実際に触ってみようとする思いが意識づけられ、次への探究につながっていくのではないかと学ぶことができた。また、実際に感触を味わうことで、そのときの気持ちやにおい、言葉、目に映ったものなども心に残りやすいのではないかと感じた。

さらなる探究

幼稚園に戻ってからは、「園庭にも里山と同じような土があればいいのに」という子どもの思いから、園庭のいろいろな場所に水をかけて泥の感触を確かめてみることになった。「すぐに形にならない…。これは違うな。」「ちょっとねっとりしてる…。里山にあった土と似てる！」と、園庭の中でも、場所によって土の性質が違うことを発見していくことができた。

園庭のほかの土とは違う感触で、すぐに形になることから、たくさんの泥団子を作ることを楽しんでいた。また、泥団子の作りやすい土が園庭にあることを友達に伝えると、「え？そうなん！？ぼくにも教えて！」と驚いた様子だった。嬉しそうに作り方を教え、たくさんの泥団子が出来上がった。

（3）田んぼの土

あらたな課題　さらなる探究

砂場や園庭の土、里山の土など、土には様々な質があることに気付き、興味をもちはじめていた子どもたち。もっといろいろな感触の土と触れる機会をもちたいと考えていたところ、R 児が隣の田んぼの土に興味をもち、持ち主の方から少し分けてもらえることになった。そのことがきっかけになり、ほかの子どもたちも今までとは違う土の感触を楽しむ姿が見られた。田んぼの土で泥団子を作ると、園庭の土より丸めやすいことに子どもたちは驚いた。また、型抜き遊びでも、型が崩れにくく、子どもたちも喜んで遊んでいた。園庭の土よりも型は崩れにくいものの、自分で水を混ぜて泥を作って遊ぶ中では、混ぜる水の量によって型が崩れてしまうことが何度もあった。そこで、水の量を微調整できるように霧吹きを用意した。

水が多くて
型が崩れてしまった

霧吹きで水の量を
微調整する

上手にソフトクリーム
の形ができあがり！

始めはなぜ型が崩れるのかわからないようだったが、「んー、ちょっとぐちゅぐちゅやなぁ…。水が多いのかな？」とつぶやく姿があった。そして、水を少なくして試してみると、きれいに型を抜くことができた。それを見て、「やっぱりや。」と納得した様子。物の性質を意識し、自分なりの理由を見つけたのだと感じた。また、その理由を試して確認し、納得しているのではないかと思った。

この遊びの中で、水の量によって泥の固さが変わることに気付き、自ら水の量を調整しようと考える姿につながったと感じる。

④カレーのルー作り

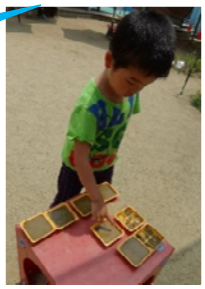
伝え合う　思いの共有

Ｓ児は、入園当初の「泥は何日間か置いていたら固まる」という経験から、はじめは日陰に置いて泥を固めようとする姿が見られた。このときは、「冷やすと固まる」と考えていたが、休日をはさみ、次の週になると、**「日のあたる所に置くと固まる」**という考えに変わっていた。とても短い期間でがらっと考えが変わったことに驚いたが、普段からたくさんの知識をもっているＳ児は、生活経験に結びつけて、考えを変えたのではないかと感じた。Ｓ児は知識は豊富であるが、実際の行動は慎重な一面があったため、実際に経験することで実感の伴った理解につながるのではないかと思われた。そのため、考えたことを実践できるようにしたり、達成感を味わったり、自分でする心地よさを感じられるように、じっくりと思いを聞きながら寄り添って援助したいと思った。

６月に入り、幼稚園で収穫したじゃがいもや玉ねぎを使ってカレーパーティーをすることになった。年少児は野菜を洗ったり玉ねぎの皮をむくお手伝いをし、包丁で切るなどのところは年長児が担当してくれた。その日、園長先生が調理するところをじっくり見ていたＳ児は、「カレーパーティー

しよかな！」と、嬉しそうに園庭でカレー作りごっこを始めた。Ｓ児だけではなく、ほかの子どもたちも鍋に泥や水を入れたり、野菜に見立てた葉を入れたりするなど、自分なりに見立てて遊ぶ姿があった。そこで、園長先生からルーの空き容器をもらったＳ児は、その容器に泥を入れてみることにした。泥は**日のあたる所に置くと固まる**という経験から、このルーの容器も置いておくことにした。そして数日後、ルーはどうなったかな？と見てみると・・・「できてるー！！」「太陽にあてたら固まるって考えてたことは間違ってなかったー！」と満面の笑みで話す姿があった。それを見たみんなもとても驚き、「ぼくもやらせて！」と大興奮だった。

ルーの空き容器に泥を入れてみる。



はなぐみでカレーごっこが始まったときは、土と水を混ぜてカレーを表現しているだけだった。しかし、Ｓ児が泥を固めて作ったルーを見たほかの子どもたちは、「すごい！どうやって作ったん？」「教えて！」とすぐにＳ児の遊びが広がっていった。Ｓ児は嬉しそうに友達にルーの作り方を丁寧に教えていた。

泥を固めて遊ぶことを重ねていくうちに、固まるにはどれくらいの時間が必要なのか、どこに置いたらいいのか、水の量の加減などを自分なりに考えたり試したりして遊んでいく姿が見られるようになった。**生活経験に結び付けて**始まったカレーごっこ。遊びの中には子どもたちの**考え**がたくさんつまっている。

あらたな課題

カレーパーティーから約２週間後、カレーごっこを楽しむ子どもたちの姿を受け、今度は年少児がメインとなってもう一度カレークッキングをしてみることにした。野菜を洗うだけではなく、包丁で切ったり、鍋で炒めたり、ルーを入れて混ぜるところも全て年少児だけで行った。実際にカレーのルーを触った子どもたちは、泥で作ったルーよりもやわらかいことに気付いた。

泥より柔らかい

カレーパーティーの後、Ｓ児は家でもカレークッキングのお手伝いをしたとのことで、怖がりながらもとてもはりきっていたので、玉ねぎの皮むきに加え、切ったり炒めたりもしたとのことだった。そのときの様子を書いたお手紙と写真を保護者の方が持って来てくださった。

家でカレー作りをするＳ児とＳ児の保護者からのわくわく発見カードから

玉ねぎを炒めると透明になっていく様子や、お鍋の中でぐつぐつと野菜が泳いでいたこと、ルーが思っていたよりやわらかかったこと、ルーが溶けて行く様子がおもしろかったことを楽しそうに見ていました。最後にはお皿洗いもしてくれました。カレーパーティーの日から料理に興味を持ち始めたのか、なにかと「お手伝いするわ。」とマイ踏み台を持って台所へ来るようになりました。

こういうことがこの子にとっては「発見」なんだなぁと、私にとっても「発見」になりました。

⑤カレーの運動遊び

よくみる　伝え合う　思いの共有　さらなる探究

「こんなふうに溶けた！」
と
ぐるぐる首を回して

カレークッキングでルーをお鍋に入れたとき、ルーのとろけていく様子をよく見て、思わず体で表現する姿が見られた。自然と出たルーのとろける表現に、言葉よりも体で表現することが多い４歳児らしさを感じた。また、ルーをよく見て、どんなふうに溶けたのかを伝えたり思いを共有したりすることができた。

普段から生き物や身近なものになりきって表現遊びをしており、その中でも、一人一人の表現の仕方に違いがあり、それらを認めていくことを大切にしてきた。子ども発のこのきっかけを大切にしたいと思い、今までの表現遊びでは足りなかった「体幹を強くする」ことも意識したカレーの運動遊びにつながっていった。

まずは、それぞれの具材の特徴を体で自由に表現して遊ぶことから始まった。じゃがいもになりきってマットの上をごろごろと転がったり、にんじんになって歩いたり、しゃがんで玉ねぎの形をになって歩くなど、具材になりきってカレーごっこを楽しむことができた。子どもたちから出てきた表現や動きから、さらに体幹を強くしたり、バランス力を養ったりすることができるように援助しようと考え、曲げるところや伸ばすところを意識できるように声をかけたり、平均台を取り入れたりしながら運動遊びを作っていった。子どもたちは、具材になりきったり、自分たちで考えた動きを楽しんだりしながら体の力をつけるきっかけになったのではないかと思う。

⑥さらさらさん・ぼろぼろさん

かかわる　伝え合う

ふるいでふるった
「さらさらさん」

ふるいに残った
「ぼろぼろさん」

さら砂作りを楽しむ子どもたちは、たくさんのさら砂を作ってペットボトルやバケツに入れて、さらさらの心地よさを感じて楽しんでいた。そこで一緒に遊んでいた保育者は、ふるいに残る砂にも目を向けることができるように、さら砂だけではなく、ふるいに残った砂も別の容器に入れて集めてみた。すると、それを触った子どもたちは、さら砂とは違った感触に興味をもち、自分で作ってみる姿が見られた。ふるいに残った砂に対して、「ぎざぎざや！」「ぼろぼろ！」などとそれぞれが感じたことを表現し、名前をつけていた。

あらたな課題

そこで、ふるいの穴の大きさが小さいものや大きいものをいくつか用意した。子どもたちには穴の大きさについては何も話さず、いつもの遊び場に置いておくことにした。新しいふるいが増えていることに気付いたＳ児がさっそく使ってみようと手にとったものは、穴の大きなふるいだった。子どもは特に気付いた様子はなく、さら砂を作ろうとする。すると、**「ん？なんかさら砂作られへん！？」**と不思議そうに話す。少ししてから、**「あ！ここが大きいんかな？」**と少し穴の大きさに気付いたようだ。次は、目の細かいふるいを持ってきて試してみる。**「あ。ほら！さら砂になったよ！」**と嬉しそうに話した。

遊んでいるうちに答えがでてきて納得している様子だったＳ児。この子の気付きや取り組む姿勢はとても大切なことだと感じた。この遊びの中で考えたことや試したことは、とても価値のあるものではないかと思う。それをＳ児にも感じてもらえるように、あえてこの流れを振り返られるような言葉掛けをすることにした。

保育者

子ども（Ｓ児）

なんで最初のふるいやったらあかんかったん？

さら砂になれへんねん。

「なんでさら砂にならなかったの？」

ここ（ふるいの穴）がちょっと大きいねん。

そうか。穴が大きいからできなかったんだね。じゃぁ次のふるいではなんでできたの？

これは穴が小さいから、さら砂が作れてん！

大きい穴でできなかったから、小さい穴のふるいを持って来たんだね。すごい発見をしたね！

保育者は子どもが「考えよう」とする姿を引きだすための言葉を意図的に掛けることで子どもが無意識にしたことを「学び」として意識化できる

このような身近な事象に「なんでだろう？」と疑問を感じて考えることが大切なのかもしれないと感じた。それが「もっと知りたい」という気持ちや考える力につながっていくのではないかと思った。

⑦カレーごっこ

よくみる　**かかわる**

ルーが上手く作れるようになると、次は具材をもっと本物らしく作りたいという気持ちが高まっていった。先ほど出ていた、ふるいに残る砂の「ぼろぼろさん」を見たＳ児は、「これ、ミンチ肉に使えそう！」と話し、さっそく自分でもつくってみることにした。しかし、「こんな色じゃなかったなぁ。」と納得のいかない様子。そこで、いくつかの色の絵の具を用意し、Ｓ児自身でミンチ肉の色を作り、ぼろぼろさんに塗ることで、本物らしく出来上がった。

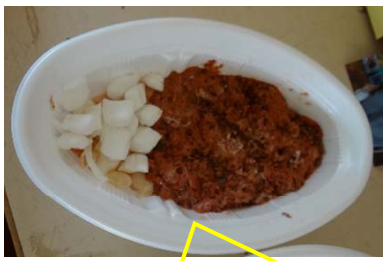
（１）材料精選

今までのカレーごっこでは、葉や実、花、石、泥など身近な自然物を具材に見立てて遊んでいた。

そこで、もっといろいろな素材を使って見立てて遊ぶことができるように、発砲スチロールのトレーや緩衝材などを用意した。これまで素材を使って遊ぶ機会が少なかったため、この活動の中では、素材に触れ、自分で選んで使う機会を大切にしたいと思った。子どもたちは、より本物らしいカレーを作ることを楽しみ、複数の素材の中から具材のイメージに合ったものを精選することができたのではないかと思う。

（２）いろいろな感触

実際に触って感触を味わうことを４月から大切にしてきた。土や泥などの自然物でいろいろな感触を味わってきた子どもたちだが、さらにもっとたくさんの感触に触れられるように、土粘土や紙粘土を用意した。紙粘土には水性ペンで自分の作りたい色を表現するために、２色のペンを混ぜて作る子どもの姿もあった。じゃがいもやにんじんといった具材だけではなく、トッピングとしてミニトマトやピーマン、たこさんウィンナー、ゆで卵、コーンも作ることになった。



緩衝材を切って作ったごはんとトイレットペーパー粘土で作ったルー

次はルー作りとして、トイレットペーパーとのりを使って「トイレットペーパー粘土」作りに挑戦した。作っていく過程では「ねちょねちょしてる！」「ハンバーグみたい。」と感触を楽しむ声が聞かれた。また、身近なものを使って粘土を作ることができるということに驚いている様子だった。

絵の具を混色して、自分の好きな色のルーを表現した絵画制作

トイレットペーパー粘土にルーの色をつけるために、それぞれが絵の具を混色して好きな色のルーをつくることができた。また、この混色は、カレーの絵画制作にもつながっていった。

（３）混色遊び

さらなる探究

４月から自然物を使った色水遊びでジュース作りを楽しんできた。

その中で、「この色水を混ぜたらどうなるんやろ？」と、自分の色水と友達の色水を混ぜるとどうなるのかということに興味をもったＲ児の言葉を受け、さっそく混ぜてみると、色が変わることを発見した。

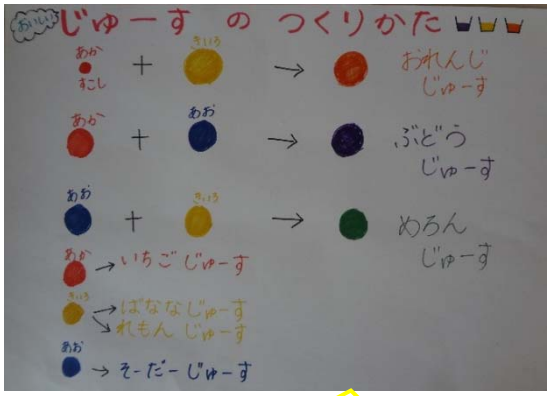
今までは色水を作ることを楽しんでいたが、色水を混ぜるという新たな遊びが出てきた。

そこから、もっと色の変化がわかるように、赤・青・黄の３原色の絵の具で混色遊びを取り入れてみることにした。たくさんの組み合わせで試していくうちに、**「青と黄色でこんなにいっぱいできた！」**と嬉しそうに話す姿があった。子どもたちは、混ぜる色の組み合わせが同じでも、それぞれの量によって色が変わることにおもしろさを感じていた。

青と黄色を混ぜても こんなに違う色が できるんだね

（４）お店やさんごっこ

水や砂、土との出会いから始まったカレーごっこ。自然物だけでなく、様々な素材を使ったカレーは、１学期の最後にお店やさんごっことして遊ぶことになった。思いをこめて作ったカレーをお客さんに食べてもらおうと、子どもたちはとても楽しみにしていた。またこのお店には、絵の具の混色で作るジュースやさんも取り入れて遊んだ。お客さんからジュースの注文を聞き、その場で混色してジュースを作るところを保護者の方に見てもらうことができた。



混色遊びからできた ジュースの作り方

何ジュースがいいですか？

ぶどうジュース　オレンジジュース

はいどうぞ

この遊びでは、お店やさんの声掛けの仕方を細かく決めたり教えたりするのではなく、数に親しみを感じたり、ルールを意識して遊ぶことができるようにと考え、カレーに乗せるトッピングの数を「５個」と決めただけだった。

トッピングは5こ えらべます！

いらっしゃいませ！

４歳児の１学期に、お客さんとコミュニケーションを取りながらお店やさんごっこをするのは少し難しいのではないかと思っていた。しかし、自然と遊びの中で数を数えて「あと２個です。」とお客さんに伝えたり、「おすすめのトッピングは〇〇です！」などと自ら話す姿が見られた。

お店やさんのルールを基盤としながらも、その場に応じた言葉でのやり取りが見られ、とても驚いた。子どもたちの思いや考えがたくさんつまったカレー。だからこそ、初めてのお店やさんごっこでも、パターン化された言葉ではなく、自分で考えて話すことができたのではないかと感じた。１学期間の保育から、保育者主導の保育ではなく、子どもの思いや興味に寄り添った保育を計画したり援助を考えたりすることの大切さを改めて学ぶことが出来た。

（ 後 略 ）